



<巻頭言>

『生』に寄り添う社会福祉 社大福祉フォーラム2023

今年度の第61回社会福祉研究大会は、新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行後の2023年6月24日（土）・25日（日）に、清瀬キャンパスの講堂・A棟・研究棟で開催された。初日の基調講演・叙勲受章者スピーチ・木田賞贈呈式・学生研究奨励賞贈呈式・学内学会総会と二日目のシンポジウムは講堂での対面とオンライン配信で行い、初日の分科会・自主企画はA棟教室・研究棟にて対面（一会場ではオンライン併用）で実施された。大会テーマは『『生』に寄り添う社会福祉～誰一人取り残さないソーシャルワーク～』で、シンポジウムも同じテーマでなされた。

初日午前の基調講演は、社会福祉法人恩賜財団済生会の炭谷茂理事長による「気候変動・災害と福祉」であった。炭谷理事長は、旧厚生省時代に人権を基本に据えて福祉行政に携わられたことや、環境事務次官時代の記者会見時のお話や、「環境福祉学会」を立ち上げられた経緯などにも触れながら、福祉と環境との密接な関係性の視点から環境福祉国家をめざすべきとお考えを提示された。

気候変動・災害による被害が貧困な地域や貧困な人びとに集中する点や、地球温暖化対策としてのバイオエタノール普及政策がバイオエタノールの原料であるトウモロコシ価格を高騰させ貧困国や貧困者に負の影響を与える点などを踏まえつつ、コミュニティーガーデンやソーシャルファームのように環境保全に資する事業や農業を地域の高齢者や障がい者の方々が担うことなどによって、環境と経済と福祉（ひいては社会）の統合的向上が今の日本社会で求められている。これが炭谷理事長の環境福祉国家をめざすべきというお考えである、と筆者なりに理解した。

この基調講演の後、2022年11月3日の秋の叙勲において旭日重光章を受章された前本学理事長・本学顧問の潮谷義子氏から、学内学会会員諸氏に対し、受章に係るお話しとともに本学の社会的使命を果たすためには人権教育が重要であるとのスピーチがなされた。潮谷顧問のお話しは、いつもながら、聴き手の心を揺さぶるものであった。

二日目午前のシンポジウムでは、新藤健太講師がコーディネーターを務め、シンポジストとして染倉有希氏（つくば市福祉部社会福祉課）、天宮陽子氏（東日本少年矯正医療・教育センター）、杉山聖子氏（入管収容問題を考えるソーシャルワーカーネットワーク）の三氏が登壇





した。染倉氏は生活保護のケースワーカーとして、天宮氏は少年院のソーシャルワーカーとして、杉山氏は非正規滞在外国人支援のソーシャルワーカーとして、「誰一人取り残さないソーシャルワーク」に関する実践活動を報告した。コーディネーターと各シンポジスト間で質疑応答がなされた後、総合討論では「自ら支援を望まない人たちもいる状況で、誰一人取り残さないことは可能か、自立とは何か」などをめぐり刺激的な議論がなされ、最後に各シンポジストから学生諸君へ有益なメッセージが伝えられた。

また、初日の分科会・自主企画の各会場でも、コロナ禍の影響が薄れたこともあり、多くの参加者が集い活発な報告・討論がなされた。

本年度の研究大会に参加くださった皆様とともに、大会開催準備に関し色々な形で支援くださった竹内幸子教授、菱沼幹男教授さらには学内学会役員並びに事務局の皆様、心より御礼を申し上げる次第である。

2024年1月

日本社会事業大学社会福祉学会会長

日本社会事業大学学長

横 山 彰

